

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 21 回 実るほど、頭を垂れる稲穂かな

前回の「コラム」(第 20 回「本気と必死」)に関して、ある方からご質問を頂いた。「...時々飯島さんの文章はよく分からない文言があるのですが、今回...『世の中自分中心に回っていると思い込んでいる、哀れな発展途上お偉い様...』という文章がありました、意味がよくわからないんですが...」ということである。

確かに、ご指摘の通り、分かりにくい、不十分な文言である。私の文章は思い込みが激しく、やたらオリジナル新造語が多く、読者の方々にはご迷惑をかけている。今回はこの「発展途上お偉い様」について述べてみる。

昔、経営者の鏡の如く言われた、例えば「松下幸之助」或いは「本田宗一郎」という人物がいた。小生直接お会いした経験は持たないが、その人となりは、あらゆる媒体を通して知るすべがある。彼らはいわゆる「相当偉い人」に間違いない。経団連や日本商工会議所等の会長や会頭は歴任していないが、そんな経歴以上に、人間として偉い間違いない。

日本人社会、相変わらず肩書き評価、会長となれば、偉い人だと思い込んでいる。しかし、松下氏、本田氏に共通していることは、そんな肩書きを目指さなかった。会長になるための策を弄したり、財力を投入したり、そんな価値観は微塵も有しなかった。

彼ら二人の眼光は常に、消費者、従業員やその家族、そして「民」に向けられていた。あの大社長が、暇があれば現場に出向き、一線で働く従業員と好んで会話をした。何でこの製品が売れないのか、消費者と直接会い、意見を聞いた。サクイ(親しみやすい)態度と巧みな会話は、多くの人から愛され、また尊敬された。そこに、偉そうな態度は全く存在しないのである。だから更に、多くの人がついていった。感銘を受け感激し、それが次第に感動となって人々の心に刻まれていったのである。

「実るほど、頭(こうべ)を垂れる、稲穂かな」...小人物ほど尊大に振舞い、優れた人物になればなるほど、謙虚になる。稲穂は実れば実るほど穂先を垂れ、頭を下げるものである。そこまでなりきれないから、「発展途上」と書いた。

人を蹴落としてもエリートコースを登り続ける官僚ども、民の顔を見たことあるか? いかにも偉そうな銀行の頭取さん、本当に、お客様の顔を見たことあるか? 地方の経済団体や業界団体のトップを取るため、躍起になっている「小ボス」達、あなたを中心に世の中回っていない。喜劇のピエロを通り越して、これはもう、悲劇かもしれない。

経営者としての教養とプライドを、何があっても持っていたい。これを失ったとたん、経営者としてのみならず、人間として惨(みじ)めになる。そんな人にはなりたくない...こんな思いが強かったゆえ、不可解な文言となったかも。謝罪の一語である。

